

# 令和7年度第3回地域福祉計画推進会議 会議録

## 1. 開催概要

日 時 令和8年3月3日（火）

場 所 川崎区役所 12階第1会議室

出席委員（敬称略）

飯嶋委員（川崎市南部基幹相談支援センター 職員）、七條委員（あいせん保育園 園長）、

寺崎委員（川崎市介護支援専門員連絡会 川崎区支部長）、

中島委員（しおん地域包括支援センター センター長）、平野委員（市民公募委員）

服部委員（川崎市川崎区社会福祉協議会 事務局長）、牧岡委員（共育ひろば主宰・社会学博士）

宮越委員（川崎区地域教育会議 議長）、三ツ森委員（川崎区民生委員児童委員協議会 副会長）

事務局

山崎区長（川崎区役所）、町田所長、若尾副所長（地域みまもり支援センター）

早川課長、三ッ橋係長、柴田（地域ケア推進課）

オブザーバー

曾我課長（地域支援課）、笹島課長（高齢・障害課）、石田担当課長（保育所等・地域連携担当）

## 2. 議題

- （1）第7期川崎区地域福祉計画進捗状況報告
- （2）地域福祉実態調査ヒアリング結果について
- （3）第8期地域福祉計画の策定について
- （4）情報交換等
- （5）その他

## 3. 配布資料

会議次第

川崎区地域福祉計画推進会議委員名簿

川崎区地域福祉計画推進会議開催運営等要綱

資料1：第7期川崎区地域福祉計画進捗状況（令和7年度）

資料2：第7回川崎区地域福祉実態調査について

資料3：地域福祉実態調査ヒアリング結果について

資料4：第8期地域福祉計画について

閲覧用：第7期川崎区地域福祉計画 本編

## 4.意見要旨

### (1) 第7期川崎市地域福祉計画進捗状況報告

資料1に沿って、令和7年度の地域福祉計画に関する取組の中から新しく動きのあった取組について進捗状況を報告。各委員に取組の進捗についての意見や感想等を求めた。

(牧岡委員) 事業番号1にある田島地区の鋼管通2丁目町内会で実施している見守り活動について、立ち上げから関わっているが、見守る側のスタッフが見守られる側の年齢になってしまっている。また、以前は見守ってほしいと登録してくれていた人は40名ほどいたが、今は20名程度になってしまっている。新規で見守ってほしいと希望する人もあまりない。見守りをしていても、亡くなってから発見することも多く、がっかりしてしまうスタッフも多い。意味ないのではないかという声も上がることはあるが、決して意味のないことではなく、早く見つけられた方が本人にとっても周りにとっても良いと思うので続けてほしいと思っている。年に数回、保健師や消防・警察の方々も一緒に見守りを行っており、とてもスタッフの励みになっていると感じている。今後も毎回とは言わないが、一緒に参加してもらえるととても助けになる。

(宮越委員) 高齢者の居場所についてはさまざまな取組が進められていると感じる一方で、子どもの居場所については取組が少ない印象がある。幼児から小学生までの居場所について、もっと見える形で情報が示されると良いと感じている。また、学校の門が開く前の時間帯の子どもたちの居場所も気がかりである。行政・学校・保護者のうち、誰がこの問題を考えるべきなのかが明確でなく、市民が取り組むべきなのかも判断がつかない。時間のある高齢者が朝早く起きているからといって手伝ってくれるとは限らず、地域でどこまで対応すべきなのか整理しきれていない。放課後の居場所も含め、今は過渡期にあるのだろうと感じている。子どもの居場所に関するリーフレットなどがあれば、困っている子に情報提供ができるため、作成を検討してほしい。

(牧岡委員) 浜町や大島のある地域では、2～3人程度の規模ではあるが、朝の時間の居場所を地域で作りはじめているところもある。

(早川課長) 子どもの居場所づくりについては、現在教育委員会やこども未来局の方で着手している。

(七條委員) 保育園では朝7時から預かることができるので、朝の居場所は確保できている。しかし、卒園すると、課題が出てくる。勤務時間の調整ができる保護者はまだ良いが、仕事を変えなければならぬかもしれないと悩む保護者から相談を受けることもある。ただ、こちらとしてもはっきりした答えを出せていないのが現状である。

(牧岡委員) 昔は、近くと同級生の家族同士協力しながら、こどもを預けたり預かったりする関係があったが、今はそういったゆるやかなコミュニティがなくなっているように感じる。保育園では、さんぼみちなどの情報を保護者に伝えたりしているか。

(七條委員) 保育園に見学や遊びに来た就学前のお子さんの保護者には、さんぼみちをお渡しするようにしている。お話を聞くと、アプリを登録している方も多い印象がある。一方で、すでに就学しているお子さんの保護者の方が、こうした情報を知らないケースが多い。

(飯嶋委員) 防災訓練についての話があったが、そういった地域の防災訓練に障害のある人も一緒に参加することは可能なのか、どのくらい障害のある人が参加しているのか、合理的配慮の提供も行っているのか話を聞きたいと思った。地域とのつながりという面でも、そういったところに私たちも一緒に参加させてもらえるとよいのかなと感じた。

(早川課長) 危機管理担当が不在のため、川崎区の詳細はお答えしかねるが、市全体の話をする、各区で実施する防災訓練等の場に、障がいをお持ちの方や支援者が参加しているケースは少なくない。災害時の避難所には様々な人が集まるため、当然、福祉的な要素は取り入れて実施している。

(牧岡委員) 以前東大島小の避難訓練に参加したが、知的障害のある人も2人くらいみかけた。

(飯嶋委員) 業務として、災害時の個別計画を作成はしているものの、実際に参加してみないと、本人も親御さんも本当にそこに行っているのか不安になってしまうと思う。私たちが作成する災害時個別避難計画の中にも避難訓練に参加するという項目があってもいいと思っている。

(中島委員) 自立支援協議会のシンポジウムの報告でも触れられていたが、認知症への関心が本当に高まっていると感じている。先日、認知症をテーマに地域ケア会議を開催した際も、いつもより参加者が積極的に発言していたのが印象的だった。一方で、認知症の“基本のキ”を知らない方もまだ多く、普及啓発の重要性を改めて感じた。また、質問の中では、包括が認知症に対してどのような支援を行っているのか知りたい様子も見られたため、そうした点についての普及啓発も必要だと感じている。包括への認知症に関する相談は多岐にわたるが、認知症になった後は後見人などの支援により問題が比較的少なくなる一方で、認知症になる前に詐欺などの被害に遭ってしまうケースが出てきている。こうした点からも、認知症になる前の段階での普及啓発も大切だと感じている。

(牧岡委員) かつて、自分が認知症の講座やサポーター講座を行っていたときは、「自分が認知症になったらどうしよう」という不安を抱える人が多く、サポーターとして関わろうとする人はあまり多くない印象だった。今はどうなのだろうか。

(曾我課長) サポーター養成講座の後にアンケートを取っているが、前向きなコメントをしてくれる方が多い。意識の変容が感じられるコメントも多く、子ども向けに実施した際には、「高齢者は怖いイメージがあったけれど印象が変わった」「おじいちゃんおばあちゃんに優しくしようと思った」といった声も寄せられている。また、フォロー講座も実施しており、熱心に参加してくださる方もいるので、そうした方に声をかけて一緒に活動できればと思っている。ただ、そうした方の多くは家族に認知症の方がおり、そのケアを担っているため、活動の時間が十分に取れないケースが多い。

(牧岡委員) 認知症に関するアンケート結果では、相談先として「家族」を挙げる人が非常に多い点が印象的だった。知り合いの家庭でも、家族が認知症になり介護が必要になった際、「もっと専門家に頼ってもいいのでは」と声をかけたところ、とても安心した様子で話をしてくれた。こうしたように、専門家に積極的に頼ることも大切だと伝えていくことが必要だと感じている。包括や介護事業所を選んで相談できる人がもっと増えるといいと思う。

## (2) 地域福祉実態調査ヒアリング結果について

資料2・3に沿って、前回の会議で説明できなかった町内会および地区社会福祉協議会のヒアリング結果を事務局から説明。調査結果についての意見を求めた。

(平野委員) 中央第2地区の地区社会福祉協議会に所属しているが、担い手が少ないこともあり中央第2地区も町内会と役員はほぼ重複している現状はある。2年任期の役員交代が最近あったが、8～9割の役員は次期も続けたいという意向があった。

(三ツ森委員) 小田地区は8町会ある。民生委員も町内会と役員が重複していたり、会議を行って情報交換するなど一緒に協力しながら行動している。小田地区社会福祉協議会では今年度からみんなのごはんを始めて、みんなで頑張っているところ。

(服部委員) 地区社会福祉協議会のイベントには町内会の会長も顔を出していただいている、とても協力してくださっている印象がある。地区社協がやっているのか町会がやっているのか分からなくなってしまうこともある。大島地区は賀詞交歓会等、町内会連合会と地区社協の合同で行うことがあるので、ほかの地区よりも一緒になってしまっている部分があると感じている。

(牧岡委員) 四谷のヒアリングには私も同席していたが、四谷地区は真ん中に産業道路を挟んでしまっているところもあり、加えて3500世帯も住民がいるので、なかなか町内会をまとめるのは難しいところもあるなど感じた。数年前に四谷町内会の会長に話を聞いたときには、前任からの引

継ぎがなく、とても困っている様子だったが、今回ヒアリングしたときには、その話はなく、町内会のことが見えてきているなという印象があった。代替わりをすると数年は活動が停滞してしまったりするが、数年たって新しい体制に慣れていくと全体が見えてくるのだなと感じている。

(飯嶋委員) お祭りが小さくなってしまっているのは悲しいところがあるなと感じた。

(牧岡委員) 確かに小さくなってしまっているお祭りもあるが、一方で、田島や大島、臨港地区のあたりでは、町から出ていった青年たちが戻ってきて久しぶりに顔を合わせる良い機会になっているなと思うこともあった。少し前の時代ではあまり見られなかった光景が戻ってきているなと感じている。

(中島委員) しおんの周辺の地域では、とても祭りに力を入れている印象がある。世代間交流として、高校生にボランティアをお願いしてお祭りを手伝ってもらっていて、とても盛り上がっている。地域ケア会議でもつながりが大事、という話をしたときに、町会長さんに、町内会を盛り上げることでつながりが生まれてくるからそういう目線でも考えて協力してほしいといわれた。

(牧岡委員) 臨港地区では、宮越委員が力を入れてつないでくれているが、中学校にお願いをして部活単位でそれぞれの町内会の祭りに参加してもらっている。そこで地域の人が中学生と会話している姿をみると、良いつながりができているなど感じる。このヒアリング結果を受けて今後どのように反映していくのか。

(早川課長) 今回の実態調査はアンケートとヒアリングを市として実施しているものなので、市の計画に反映させつつ、川崎区としても、地域づくりとして重点地区を決めて取り組みを進めているところなので、そういった部分で反映させていきたいと考えている。

### (3) 第8期地域福祉計画の策定について

資料4に沿って、来年度策定する第8期地域福祉計画の概要について説明し、意見等を求めた。

(牧岡委員) 200ページ程度になる想定とのことだったが、学習会などを実施しない限り、すべてに目を通してもらうのは難しいのではないかと感じている。読んでもらうための戦略を考えてほしい。また、現在の計画にも記載されているが、区社協エリアの地図を作成したのだから、それを見ながら区社協単位でワークショップを行い、次の3年間でやりきることを決めるといった、まちづくりの視点での取り組みもよいのではないかと考えている。人数は多くても10人程度で、たとえば他地域では「高齢者や子どもが話せるようなベンチをつくろう」といった案が出て、3年間かけて調整し、実現した例もある。狭い地域単位で皆で考えて何かを形にすることで、それが“絵”となって見えると、地域の気持ちや雰囲気も変わってくるのではないかと考えている。

### (4) その他

資料に沿って、2月23日に実施した「2時間でわかる！ボランティア入門」の実施報告を行った。

(牧岡委員) アンケート結果を見ると、現在ボランティアに参加していないと答えた人が、思っていたよりも多かった。もう少しボランティアに参加しやすくなるように、イベントの中で周囲にブースを設けるなど、参加への道筋をつくってあげてもよかったのではないかと考えている。また、久しぶりに会った人とも話をしたが、以前はボランティアに参加していたけれど、最近は何もできていないと話していた。そういった人たちが再び関わられるような仕掛けがあってもよかったのではないかと感じた。

## (5) 情報交換

(飯嶋委員) 南部基幹相談支援センターが現在の体制になって4年ほど経つが、障害者の相談支援センターそのものの存在だけでなく、障害のある人が地域で暮らしているということ自体も、まだあまり知られていないのではないかと感じている。支援が必要なのに、十分に手が届いていない人が多いエリアでもあるため、私たちの存在を知ってもらえるように、地域福祉計画にも位置付けられるような活動を増やしていくことで、そうした人たちに少しずつ近づいていけるのではないかと感じている。最近の動きとして、地域の中にシェアハウスのような形で障害のある人が住んでいるグループホーム(GH)があることを地域に十分知られていなかったが、最近の動きとして、福祉サービスの中で、地域の方々を招き会議をすることが求められるようになってきた。あるGHでは民生委員や町内会の方々を呼んで会議を行い、参加者には内部の見学もしてもらったという話を聞いた。これまでひっそりと暮らしていた場所が、少しずつオープンになってきているところである。GHの方と話す、町内会に加入することはまだ難しいという声もあるが、こうした交流を重ねることで、地域に根ざして暮らしていけるようになると良いと感じている。

(牧岡委員) 大島にもGHがあり、そこは町内会にも加入していて、祭りにも参加してブースを出すなど、地域とのつながりがしっかりできていると感じている。一方で、地域生活支援拠点たじまは、会議室を地域に開放し「ぜひ使ってほしい」と言ってくれており、その点はとてもありがたい。しかし、現状では会議室を借りるだけの関係にとどまってしまっていて、利用者との交流やつながりが生まれていない。地域の人たちも、たじまを“貸館施設”として認識してしまっているのではないかと感じており、そこがもったいないところだと思っている。

(七條委員) 洗足こども短期大学で学生募集が停止されることなども踏まえ、次の担い手が不足していると感じている。少しでも次世代の担い手が増えるようにと、中学生の体験や見学の受け入れを行っているところである。実際にボランティアとして現場に入ってもらえると、本人たちにとっても気づきがあるのではないかと感じている。保育園の数は増えているが、人手が足りていないのが現状である。潜在保育士は多くいると思うものの、担い手として戻ってきてもらうにはどうすればよいか、まだ十分に見えていない。そして、これはまた別の話になるが、小さい子どもが5人いる家庭では、誰かしらが風邪をひいてしまい、仕事に行けず、保育園を辞めざるを得ないかもしれないという相談もある。熱がなければ預けに来ていいと声をかけたり、病児保育について案内をしているものの、なかなか難しい問題で、こちらとしても適切な対応がまだつかめていないところである。

(寺崎委員) 住んでいる東京都では、物価高対策の給付金がアプリで配布されるようになり、デジタル格差を強く感じている。仕事でもひとり暮らしの高齢者のお手伝いをしているが、マイナンバーが絡む手続きの場合、委任状だけでは代理で対応できないため、非常に扱いが難しい話になってしまっている。デジタル化によって便利になる一方で、高齢者が置き去りにになってしまっている現状が悩ましい。実際、高齢者からのこうした問い合わせが増えている中で、デジタル化は本当にこれで良いのだろうかと考えさせられている。

(服部委員) 川崎区役所が公開している町内会や民生委員のインタビュー動画を拝見したが、とてもわかりやすく、このように動画など視覚的で理解しやすい形で情報を発信していく取り組みはとても良いと感じた。また、社会福祉協議会でも来年度に地域福祉活動計画を策定する予定があるため、地域福祉計画の策定とあわせて、同じ方向を見ながら進めていけると良いと感じている。

(平野委員) 先ほどデジタル化についての話があったが、中央第2地区社協で発行している広報誌「きずな」も紙媒体からデジタル化しようとしていたが、住民から「紙の媒体での発行を楽しみにしている」という声が挙がったため、引き続き紙で発行することになった。また、「きずな」の編集後記にも書いているが、健康寿命を延ばすために私自身は“貯筋”に取り組んでいる。みなさんにも、病院や役所の待ち時間に座って待つのではなく、立ったまま待つなど、筋肉を衰えさせない工夫を続けてほしいと感じている。

(三ツ森委員) 民生委員としては、小学校や中学校と情報交換を行っている。小田地区では防災に力を入れており、東小田小学校と連携して防災訓練を実施している。小田五・六町内会では、図上訓練を行うなど、さまざまな取り組みを進めている。

(中島委員) 「まちを元気にするには何があるとよいか」という点について、以前に聴いた大学の先生のお話の中で、外出しやすくするためには、少し休めるベンチがあることや、徒歩圏内に運動できる場所が複数あることが大切という考えが示されていた。この考え方を参考にしながら、しおんのエリアでは「ほほえみ元気体操」の普及に取り組んできた現在、本町・榎木町・旭町・新川通・境町・港町で、すでに体操を実施しているところや、実施を希望しているところがあり、かなり広がってきたと感じている。今年度は何に取り組もうかと考える中で、認知症に関する相談が多いことや地域の関心も高いこと、さらにしおんの管轄内には市立病院のオレンジカフェ以外の認知症カフェがないことから、認知症の介護相談会を立ち上げるなど、認知症の分野を丁寧に進めていきたいと思っている。取り急ぎ、3月27日に「介護の悩み話そう会」という会を立ち上げる予定で、ケアマネや介護事業所の方々も参加してくれることになっている。ゆくゆく参加者が増えてきたら、専門職にも来てもらい、まちの保健室のような形に発展させていければよいと考えている。

以上。